

Title	「出口のない道」のその先：森岡正博『無痛文明論』によせて
Author(s)	三浦, 隆宏
Citation	臨床哲学. 6 P.55-P.61
Issue Date	20050-01-07
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/12767
DOI	
Rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

《書評：『無痛文明論』》

「出口のない道」のその先

——森岡正博『無痛文明論』によせて

三浦 隆宏

はじめに

現代社会を、「無痛文明」という病理に飲み込まれつつあるものとして捉え（i 頁）¹、その病状を丹念に観察／記述してゆく森岡正博の『無痛文明論』は、おそらく思考という営みがまなざしを向けうる最大級の〈対象〉を相手にした書物であるといつてよいだろう。そしてまた、いっけん幸せそうに暮らす人びとのその表情の裏側に、じつは伏在する漠然とした「不安」の根を嗅ぎとり、その原因を探求するこの書物は、いまだ顕在化していない〈問題〉の根元を敏感に嗅ぎとってはそれを明るみに出しているという点で、社会の足もとから思考／言葉を紡ぎだしている書き物であるといつてもよいはずである。視野の広さと深さ、これら両面において森岡の著書は、その重量にふさわしいスケールの大きさをもっている。

とはいえ、その射程が最大限に引き伸ばされていることとひきかえに、この書物は、記述の明快さ、論理の緻密さをいくらか欠く結果ともなったようだ。著者じしんが自著をさして、「穴ぼこだらけ」「隙だらけ」と形容するゆえんである²。けして「難解」なわけではないが、論述は込み入り、かつ冗長である。しかしながら、ものごとを「あらかじめ予想した範囲内に収まるようにコントロールしようとする」ことをもって「無痛文明」と著者が言い表わす（345 頁）以上、本書の叙述スタイルは、それに抗うよう最大限心がけた結果であると私たちは解するべきなのだろう。——《無痛文明論もまた、無痛文明の側から見たとき、それがいったい何なのか、さっぱりわけの分からないものでなくてはならない》（244 頁）。さらにいえば、思考（という「刃物」）の対象にほかならぬ〈著者じしん〉、〈私たち自身〉が含まれていることもまた、本書が「わけのわからない」趣をもたざるをえなかった一因であるとも思われる（108 頁以下参照）。——《真の敵が誰なのかわからない。どの敵を倒せばいいのかわからない。そしてこの自分自身が敵なのかもしれない》³（110 頁）。本書が「異様」と評される⁴のも、たぶんに著者が、こういった〈わけのわからなさ〉というものに、「無痛文明を解体させる真の可能性」（112 頁）を読みとり、それを方法的に駆使していることに起因するのではないだろうか。

以下ではまず、「無痛文明」「無痛奔流」「身体の欲望」の順に本書の内容を手みじかに跡づける。そのうえで、著者が無痛文明からの脱出の決め手とする「生命のよろこび」という

言葉に着目したい。著者は、「生命のよろこび」にひとたび活路を見いだしたものの、この概念の中身をじゅうぶんに記述することができなかつたために、結果として論全体を悲観的に終えてしまわざるをえなかつたのではないか——これが、評者のもつ問題意識である。

現象の記述と概念の創出

現代社会が「無痛化」しつつあるという著者の認識にたいして、とりたてて異論を唱える者はいないだろう。その認識が、「巨大で柔らかで透明なシステムに自分の生が包囲されている」(345頁)というふうなかたちをとるかどうかはべつにしても、そして著者が現在よりもさらに「無痛化が進んだ社会」として想定しているその姿(34-35,52-56,348-349頁)が的を射たものであるかどうかは(少なくとも現時点では)判断がつかないにしても、社会が「痛み」を(苦しみやつらさを)遠ざける方向に進んできているのは確かなことであると思われる。森岡は「無痛文明」の原イメージを、(1)社会全体へと拡大された集中治療室、(2)社会規模の自縄自縛、(3)二重管理構造を徹底したビオトープの社会全体への拡大、(4)自己治癒するシステムとしたうえで、それぞれの具体的な相貌を、第一章から第三章、第六章、第八章において詳述している。家畜工場の中の家畜、選択的中絶と条件付きの愛(そしてそれをサポートする先端医療技術のテクノロジーやメディア)、家庭内での夫婦の共犯関係、人間によって飼い慣らされた／管理された自然——これら具体的な場面を例にとって、「無痛化」する現代社会のさまを暴き出してゆく筆致は、(個々人によって好き嫌いはあるにせよ)本書のきわだった特徴のひとつをなしているといつてよい。

そして、これら〈現象〉の記述と平行して森岡は、社会／文明をこのような「無痛化」へと押し進めている当のものとして、「無痛奔流」という概念を創出し、その内実を探つてゆく(第三章:117頁以下、第八章:349頁以下)。「無痛文明論のもっとも中心的な概念のひとつ」(118頁)であり、「われわれが真に戦うべき相手」(245頁)と宣告されるこの概念について著者は、マルクスの「資本」やルーマンの「コミュニケーション」、フーコーの「権力」、そしてネグリ＝ハートの〈帝国〉といった諸概念を、(事後的に)参看しながら彫琢してゆくが、本書の構造においてとりわけ重要であると思われるのは、(先ほども少し触れておいたように)著者が、この概念を、私たち一人ひとりとの相関関係のもとに捉えている点である。——《無痛奔流と戦うとは、どういうことなのか。それは私の外部にあるものと戦うことであり、同時に、私の内部にあるものと戦うことである》⁵(341頁)。なぜなら、「無痛奔流」とは、私たち一人ひとりの「身体の欲望」が、「社会的に編成された」ものにほかならないからである(131頁)⁶——そう著者はいう。

「無痛文明論のもっとも基本的な概念」(355頁)と著者がいう、この「欲望」という概念は、本書のいわばかなめをなすものであるといつてよい。というのも、無痛文明から脱出する鍵を森岡は、身体の欲望を生命の欲望に「転轍」(211頁)することに求めているからである(第五章)。——《欲望の流れる方向を、枠組みを維持したまま所有物を増やす方向から、枠組みを前向きに解体して自己変容する方向へと誘導してやれば、身体の欲望はいつのまに

か生命の欲望へと変質しているはずである》(212頁)、《私が提唱しているのは、身体の欲望を生命の欲望へと変換し続けることによって、われわれは無痛文明を脱出する扉により近づけるのではないかということだ》(235-236頁)。森岡は、この「転轍」のきっかけを、「私の死」の自覚に見だし、自身の興味ぶかいエピソードとともに論じてゆくが(第七章)、ここではふれることはしない。

なぜ「無痛化」は問題なのか

では、現代社会を覆う「無痛化」——「予防的無痛化」(27,52頁など)⁷——が〈問題〉として問われなければならないその理由とはいったいどのようなものか。なぜ、無痛化する現代文明は「解体」(136頁)される必要があるのだろうか。どうして私たちは、自分じしんの「身体の欲望」と、ひいては「無痛化する現代社会の大きな流れ」と、戦わなければならないのか(74頁)。「苦しみとつらさのない文明」——それは「人類の理想」ではなかったか(3頁)。

著者によればそれは、予防的無痛化が、「私から生命の可能性を奪い取っていく」からである。つまり苦しみと出会うことで、「いままで直視するのを避けてきた自分の隠された姿と向き合い、自分自身を解体させ、そのプロセスを経てあらたな自己が再生して立ち上がってくる、そういう可能性」が私たちから奪われてしまうこと、このことを著者は危惧するわけである(52頁)。であるならば、「身体の欲望」によって奪われ(18,122,347頁)、「予期せぬ主体の変容から生まれる」(21頁)とされる、「生命のよろこび」とはいったいどのようなものなのか、この点を私たちは詰めなければならないはずである。

そこで、この言葉にたいする著者の記述をたどってみることにしよう。森岡ははじめにこの概念を、「自分の内側から、古い殻を突き破って、いままで知らなかった新しい自分がありありと生まれ出てくるときにおとずれる、「ああ、生きていてよかった」というよろこびの感覚であり、自分はこんなふう生まれ変わることができるのだということを知ったときにおとずれる、すがすがしく風通しのよいよろこびの感覚」、「成長と変化と死を本質とする生命という形をとって私が存在しているのだ、ということを感じて自己肯定できる感覚」(18-19頁)だと述べ、さらにそれは、「私が得ようとして得られるもの」ではなく、「苦しみとつきあって私を変容させてゆくなかで、〈予期せぬ形で〉私におとずれるもの」、つまり、「求めようとして得られるものではなく、まったく予期せぬときに、予期せぬ形でおとずれるもの」であるとする(22頁)。ところが、これ以降の箇所では、〈苦しみのなかで自己の崩壊と再生を経験したときにおとずれる、予期せぬ生命のよろこび〉(123頁)、「自己解体していくなかで訪れる「生命のよろこび」」(158頁)、「私が自分の人生のなかで苦しみに直面して崩壊し、そのなかから予期せぬ仕方で再生するとき」におとずれる「生命のよろこび」(181頁)、「自分を再生させたときのよろこび」(182頁)、「苦しみに直面して崩壊と再生をくぐり抜けたときの「よろこび」」(183頁)、「苦しむべき苦しみをくぐり抜け、自分の枠組みを解体し、そこから再生したときにおとずれる「生命のよろこび」」(213頁)、「かけがえのない一回性のよろこび」(217頁)、「全身が震えるようなよろこび」(232頁)、「予測できないできごとによって、

私が変容させられていくよろこび」(同)といった類似表現に記述が終始してしまい、「生命のよろこび」という言葉そのものの意味をこじ開けるような具体的な記述は見られなくなる。そして不思議なことに、第一章第4節(18-23頁)、第五章第5節後半(231-233頁)、第七章第5節後半(332-335頁)で夥しくも繰り返かえされていたこの言葉が、本書の結論部分に当たる第八章では、ほとんどその姿を消してしまうのである。いったい、これはどうしてなのだろうか。

「生命のよろこび」——無痛文明の〈彼岸〉

ことの真意は、著者に訊いてみるよりほかはない。とはいえ、「無痛奔流」「欲望」「無痛化(装置)」といった言葉が、第八章において再度取りあげられ、練り直されているのにたいして、「私が無痛文明に対抗し、前方へとくぐり抜けていくことのできる唯一の地盤」(132-133頁)と宣言されていた「生命のよろこび」の概念が、影をひそめてしまうこと(そして「自己治癒する無痛文明」の記述をもって本書が閉じられてしまうこと)には、なんらかの本質的な理由があるのではないか。以下では、この言葉それじたいに含まれているアポリアを指摘することで、その理由を推測してみたい。

まず、はじめの理由として、「生命のよろこび」は無痛文明の〈彼岸〉に位置している以上、「無痛文明の住人」(179頁)である著者には、それがどういうものなのかを記述することができない／できてはならないということが考えられる。その意味で、著者にできることは、無痛文明の〈外〉において不意におとずれる「生命のよろこび」の存在を、ただ名指す／予測することまででしかありえない。したがってこの概念の記述は必然的に、「それは「生命のよろこび」ではない／とは言えない」(22-23頁、強調は引用者。以下おなじ)とか、「予測の枠組みを否応なく超え出て行くことがもたらすかもしれないよろこび」(123頁)、「「よろこび」というものを、私は獲得することができるかもしれない」(332頁)、「「よろこび」もまた立ち現われるかもしれない」(同)、「「よろこび」が私に与えられることがある」(同)、「私に与えられるかもしれない「よろこび」」(333頁)といった推測表現をとらざるをえないわけである。以上は、この概念の存在そのものに起因するアポリアであるといってよい(それゆえ、著者の記述のしかたそのものが原因なのではない)。

しかし、この概念の記述そのものの中にも難点が含まれているようにも思われる。さきにも引いておいたように、森岡はこの概念を、〈それまでの自己が解体し、新たな自己が再生するときにおとずれる〉ものだと定義する。しかし、新たに再生した自己におとずれるところの「生命のよろこび」が、まさによろこびとして感受されるのはどうしてであろうか？

たとえば永井均は、「哲学をすると何が得られるのか。どんないいことがあるのか」という問いに答えて、つぎのように言っている。——《哲学的な思考を身につけたときには、やる前とで物事を理解する枠組みが変わってしまっているから、前の自分とは比べられないし、どんな利益があるのかもわからない。やる前と後とでは共通の尺度がなりたたない》⁸。すなわち、「どんないいことが」という問いの「いい」の意味が、やってみる前と後とでは変わっ

てしまうのであって、それゆえ、「前後を通じて共通の価値基準は存在しない」というのだ⁹。

この考えは、「それまで維持してきた自分というものが解体し、いままで予想もしなかったような自分が内側から立ち現われてきて、予想もしなかったような世界が目の前に開ける」(21頁) ことによって得られる「生命のよろこび」にも、同様に当てはまることであると考えられる。げんに森岡も、つぎのように述べていた。——《「生命のよろこび」がおとずれる前とその後では、「自分」のあり方が根底から変化していなければならない》(22頁)。だとすれば、「苦しみのなかから自己を変容させていこう」とするときにおとずれる「生命のよろこび」(19頁) が、再生した私にとって「よろこび」として感受されるその理由はどこにあるのだろうか。著者は、「その内側から「よろこび」が消去された世界」である無痛文明においては、「もし仮に「よろこび」がおとずれたとしても、よろこび不感症になっている無痛文明の住人たちは、その感覚を、いままで体験したことの無い大いなる「不安」として感受することだろう」(123頁) と述べているが、このことは、自己を解体したうえで新たに再生した「私」にも、同様に当てはまることなのではないか。そうすると、「自己解体の果てにおとずれる「生命のよろこび」は、どんな快樂や刺戟よりも深い」(214頁) とは一概にいえないはずであろう¹⁰。もっとも、この点にかんしてであれば、著者じしんこう述べてもいる。——《もちろん、当初に予期していた気持ちよさの内容と、転轍されたあとで味わうことのできる気持ちよさの内容は、まったく異なっている》(同)。しかし、もしそうだとすれば、「無痛文明」の住人である私たちは、現在／じっさいに享受している「快適さ」「安定さ」を捨て去ってまで、著者がいう「生命のよろこび」(それがどういうものであるのかを、現時点の私たちは知りようがないのであった) を得たいと果たして思うだろうか？

著者が挙げていた例を取りあげてみる。タバコを吸っていた自己が、なんらかの理由でタバコを吸えなくなり、結果としてタバコを吸わなくてもすむ自己になったとして、その自己は、ほんとうに「何ともいえないよろこび」を感じるのだろうか(19-20頁)。後者の自己にとっては、結果的に、タバコを吸わないということがもはや自明のことになっている(そうでないと、それまでの自己が解体し、新たな自己が再生したとはいえないはずである)のであって、それゆえ〈タバコを吸わないですんでいる〉というそのことによってそのひとが、とりたたて「生命のよろこび」を感じるようになるとはいえないのではないか。

これはすなわち、「生命のよろこび」というものは、現時点の私たちにとっての〈彼岸〉というかたちでしか、提示できないということであって、私たちがそれをじっさいに味わうことはできない／できてはならないということである。著者は、「それまで気づかなかったような新奇な世界、新奇な自分を発見する可能性がある」(362頁)、「まったく未知の新世界がわれわれの前に開けてくる可能性がある」(同)という表現を用いているが、「生命のよろこび」にたいしても、これは同様に当てはまる。つまりこの概念は、「よろこびへの期待」(334-337頁)というかたちでしか語れないのである(以上は、「生命のよろこび」を過剰にイデア化し、過大に捉えすぎていることに起因する誤読であるかもしれない。しかし、ふつうの「よろこび」であるならば、無痛文明の内部においても、私たちは日々それを経験しているのではないか。

無痛文明の堅固さを著者が強調すればするほど、この概念はよりいっそう形而上学化されざるをえなくなるのではないか、というのがここでの評者の疑問である)¹¹。

おわりに

いずれにせよ、「出口のない迷路」(i 頁)、「出口のない、不安に満ちた快の世界」(80 頁)、「出口のない反復の世界」(84 頁)、「果てしない「自己との戦い」」(143 頁)、「出口のない閉塞状態」(157 頁)と書きしるしつつも、「無痛文明から脱出する出口」(141 頁)、「無痛文明の外部へと脱出する道」(193 頁)を捜し求めていた森岡は、ある箇所でこう結論づけてしまう。——《われわれが、無痛文明の罫から逃げ切れるということはあるあり得ない。われわれが身体をもって生きているかぎり、それはあり得ない》(241 頁)。結果的に本書は、「無痛文明」の解体不可能性を強調することをもって終わってしまっているという印象を私たちに与えることとなった(もちろん、本書は「無痛文明」論なのであって、そこからの脱出の手立てを考えることそのものは主題としていない、ということはある)。

しかし、たとえそれが「出口のない道」(99 頁)であったとしても、私たちが無痛文明から脱出するためには、道筋は切り開かれなければならないのだ(59 頁)。「出口のない道」のその先へと進むこと、すなわち「無痛文明」からの脱出の鍵である「生命のよろこび」についてさらに豊富な言葉／思考を紡ぎだしてゆくこと——森岡の『無痛文明論』はまだ途だえてはならないはずである。

注

1 森岡正博『無痛文明論』(トランスビュー、2003 年刊)。以下、本書から引用するさいは、頁数を併記する。

2 生命学 HP で公開されていた、2004 年 2 月 1 日の日記参照。

3 ほかにたとえば、95 頁 9 行目から 14 行目、131 頁 8 行目から 9 行目の記述を参照。

4 宮崎哲弥の書評(朝日新聞 2003 年 11 月 16 日掲載)参照。

5 ほかにたとえば、121 頁 11 行目から 18 行目の記述を参照。

6 それゆえ、人間が「無痛奔流」と戦うことには〈徹底的な困難さ〉がつきまとうことになる。著者はこれを、「無痛化する現代文明の根本問題」(122 頁)と述べている。

7 森岡はこの概念を、「無痛文明論の最重要概念のひとつ」(27 頁)として位置づけている。

8『大学は研究室で選べ 2』数研出版、19 頁。

9『学問はおもしろい』講談社、21-22 頁。

10 同様に、「他人を支配関係のもとで搾取している快樂や安楽よりも、自己解体していくなかで訪れる「生命のよろこび」のほうが、自分の人生にとって比較にならないくらい意義深いということに気づくはずだ」(158 頁)ともいえないはずである。

11 (揚げ足を取ることになるかもしれないが) さらに、一点つけくわえる。「生命のよろこび」が訪れるさいの形式である「予期せぬ形」という言葉に着目したばあい、「死」や「事故」もそういったかたちをとることが多い。無痛化する現代社会においては、「われわれの存在を心底から脅かすような本物の苦しみや、予期しなかった本物のハプニングというものは、ほとんど存在しない」(24 頁)と著者はいうけれども、それでもしかし、「予期せぬ死」(7,9 頁)や、「予期せぬ事故」(11 頁)は、私たちの生活から後を絶ちそうにもない。ひとは理由もなく殺されるばあいがあり、交通事故に巻き込まれもする。つまり、予期せぬ形で、他者によって被害を受ける可

能性も一概に否定できないわけである。そのことを認識したうえで、果たして、「何が起きるか分からない未来に対してみずからを開きながら、そこで出会うかもしれない未知の交わりを求め続けることのほうが、もっとスリルに満ち、全身が震えるようなよろこびにあふれている」(231-232頁)と私たちは言い切れるだろうか。

